

---

# がくつば！

マグネス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
がくつば！

【Nコード】  
N0476Z

【作者名】  
マグネス

【あらすじ】  
ミッドチルダのとある高校の二年生東条神楽と、教師のツバサ・ランスローの中で芽生え始めた感情が起こす禁断の恋の物語。他作者様のオリキャラを加え、波乱万丈な学園生活が幕を開ける！笑いあり、涙なんて殆ど無しストーリー！

## ブログ 生徒会での風景と校長室

「ミーナ先輩、この仕事全部私がやらなきゃいけないの？」

山積みになった書類に目を向けながら、キツチリと第一ボタンまで締め、リボンを胸元に着けた少女 生徒会役員の東条神楽がその文句を漏らす。無理もないだろう、書類の量は二人分なのだから。眼の前で紅茶を啜りながら、自身の仕事の半分を生徒会長でもあり、恋人でもあるロイに押し付け……基お願いし、随分と量が減った書類に目をやった後に金色の髪を揺らし、赤色の瞳で神楽をスツと見据えながら。

「当たり前でしょう？ 仕事は全員、割り当てられた分をやる物ですから」

屈託の無い笑顔でそう言った。それに対して神楽は先輩相手とは言え、少しばかりカチンと来たのか、引き攣った笑みを浮かべながら。

「でも……ミーナ先輩はロイ先輩に、仕事押し付けてるよねえ……？」

引き攣った笑みを張り付けた神楽の口から漏らされた声は、表情とベストマッチ。そう呼ぶに相応しいほどに震えており、少しばかり苛立っているのがその場の全員に伝わる。

ロイは書類に通していた目を神楽の少し後ろに設置されたソファ  
ーで三週間ほどに迫った定期テストの問題を作成している教師、ツ  
バサ・ランスローに向けた。

ツバサもその視線に気付いたのか、スクリーンに向けていた目を  
ロイの方へ向け、目で“あの二人なら平気、先に仕事を終わらせな  
”と伝えた。

生徒会の顧問であるツバサはまだ教師として一年も勤めていない  
若輩者だが、それでも生徒に対しては深く関わる様にし、信頼出来  
る様にしている。

その為か、それともミーナの事を本当に信じているからか分から  
ないが、ロイも安心したのだろう。

再び書類を目に通し始めた。

しかし、ロイの耳に届いたのは“ロイは私の為に色々と尽くして  
くれますから”だったり、“彼氏をこき使いすぎじゃない？ロイ  
先輩じゃなかったら少し危ないかもよ？”だったりと頭が痛くなる  
ような物だったとか無かったとか。

そもそも大学を出たばかりのツバサが採用された理由、それがツ  
バサ本人も未だに理解出来ていなかった。

\*\*\*\*\*

在校生が進級し、新入生が入学する時が近づいていたある日。

校長であるルークⅡRⅡハラウンは一枚の書類に目を通し、何故かそこに記載されていたプロフィールを口クにも読まずに、採用と言ったのだ。

当然、その場にいた教職員達は驚きの声を出さざるを得ないだろう。

「悪いが、俺は反対だ。そもそも、今ここはそんなに教員を必要としていない。事足りているのに何で大学出たての若僧を」

偶々用事で校長室を訪れていた教師生活三年目になる教員、ヴィレイサーⅡセウリオンは壁に靠れ掛かりながら溜め息と共に悪態を吐いた。

「貴方も大学を出たての頃、ルーク様に雇われただけでしょう」

ブツブツと文句を漏らすヴィレイサーの心に突き刺さる、容赦ない一言をルークの側近である教頭のアイリスがそつと呟く。

同時に、ヴィレイサーの文句も止まり、顔を赤くしながら“まあ、俺が口出す事でも無いしな”とだけ言い残して彼は部屋を出て行っ

た。

「アイリス、そこは触れちゃアカンだろ……。俺が思いつきで立ち上げたこの学校、経験がある教師なんて来るわけが無くて雇ったのがヴィレイサーだったんだから」

ドアが閉まる音が完全に無くなるのを合図に、ルークは椅子を回転させ、隣に凜とした姿勢で立つアイリスに視線を向けながら、苦笑を浮かべてそう言った。

それに対してアイリスは“以後気を付けます”とだけ返したが、話してる間もその凜とした姿勢を崩さずにいた。

何でも、姿勢を正中に保つと長時間立っていても疲れにくいとか。

「それで？　今回は何で採用を決めたのですか？」

珍しく首を傾げ、心からの疑問をぶつける様に尋ねてくるアイリスに向かってルークは。

「写真の眼が気に入ったから、それだけだ。さーて……。今日は仕事も終わったし、俺は早く帰ってフェイト分を……」

と返し、最後にふしだらな感じの言葉を残して行ったがアイリスはそこだけ聞かないように耳を塞いでいた。

その行動をしているアイリスは、自分が何かを言っても聞こえな

いと思ったのだろう、ルークは整った顔立ちの中で一番目立つ紅色の瞳を少し細め、口角を持ち上げながら。

「あ、校則に一つ追加したいんだけど『パンストを履く場合はダメージパンストのみ』ってのはどう？」  
「却下です」

笑みを浮かべ、仕事中の真面目さを感じさせないくらいに無邪気な表情をしながらそう言ったが、一瞬で切り落とす勢いで却下されてしまい、不満を覚えながら、ルークはある事に気づいた。

そう、アイリスは耳を塞いだまま意見を却下したのだ。まさか自分が何を言っても否定するつもりだったのではないか、ルークは心の中で疑心を湧き上がらせながら思いきって尋ねる事にした。

「なあアイリスさんや、俺が何を言っても却下するつもりだったんじゃないかい？」

「そんなわけないでしょう、読唇術ですよ」

しかし、返って来た答えは至極単純、だが万人には出来ない技術を駆使した物だったので納得せざるを得ないルークだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0476z/>

---

がくつば！

2011年12月1日22時52分発行